

メディア人脈を考察する

—— 戦中・戦後の三つの「事件」から

飯田 いいた 和郎 かずお
(一般社団法人アジア調査会理事)

第3章 日中国交正常化の扉を開く

第5節 「冷めた」視線 2人の対中姿勢

中国大陸での占領地を管理・運営する日本の政府機関、興亜院満疆連絡部（現在の河北省張家口）に向経験のある外務大臣、大平正芳。かたや戦前から中国問題専門のジャーナリストだった毎日新聞社会長、田中香苗。同じ香川県人の2人は、それぞれの立場から日中国交正常化への道を進んでいった。

もつとも、深い贖罪意識だけに基づき、自らの職務を遂行するならば、政治家であれ、ジャーナリストであれ、職業人として失格である。大平正芳も、田中香苗も戦前に端を発する中国への贖罪意識の一方で、冷静、冷徹な視線を中国に向けていた。

大平正芳から検証してみたい。1972年9月25日、国交正常化交渉のために、中国入りした場面に戻る。田中角栄ら一行は、北京空港から市内まで車で移動した。沿道至るところに動員された無数の市民が造花を振りながら、「熱

烈歓迎」を繰り返して叫んでいた。同行した娘婿で秘書の森田一によると、車中の大平はそれに目をやりながら「こつちが選挙区だったら、楽だろうな」と軽口をたたいたという。³⁰行く先々で同じ光景が用意されていた。

その5日後。北京から上海を経由して帰国する機中で、大平正芳がつぶやいた言葉も森田一は忘れていない。「いまは（日中友好を歓迎する）熱狂的なムードだけど、25年か30年たったら雰囲気が変わるよ」。「日中共同声明」に署名、国交正常化の扉を開いた直後のことである。本来なら凱旋帰国の前に、気分が高揚するはずだが、大平は冷静に、のちに起こり得る中国側の空気の変化を早くも予期していた。

中国は対立するソ連への抑止力として日米に接近し、とりわけ日本には国家建設のため資金・技術供与を期待した。日中間には当時、とてつもない経済力の差があった。しかし、やがてその差が縮まり、さらに中国が日本を追い越すような事態になれば、難しい関係になるだろう。大平はそんな樂觀できない予感を持っていた。

事を成し得たら、次へ。のちのことだが大平正芳らしさが表れるのが、首相に就任した当夜の出来事だ。森田一によると、大平は自民党総裁選で圧勝した1978年12月1日、「さて、いつ辞めるか」と口している。驚く森田に對し「『なる』より『辞める』ほうがたいへんなんだ」と

つぶやいた。³¹熱望し続けた総理の座に就いたというのに、常に先の先を考えていた大平らしい。

同じことは、田中香苗にも言える。田中も危惧を抱き始めていた。

彼ら中国の連中は、ニコニコ顔で迎えるかと思うと、トタンに、ギョツと引しめてかかる。引しめたかと思うと、サツとゆるめる。日本人は、そのテクニクにすっかり、かかってしまう。和氣アイアイということで、いごきげんになっていいものか。中国とともに歩んだ私にとって、現在の状況は全く心配でならない。³³

東亜同文書院の学生時代から中国特派員時代を通じ、実体験から得たものである。田中香苗ならではの中国人論を披歴したのは、国交正常化の翌73年7月。同年9月には東京・上野動物園に、中国政府から寄贈されたジャイアントパンダのカンカン、ランランが来園し、2頭の珍獣をひと目見ようと、動物園には来場者の長い行列が絶えなかった。日本に空前の中国ブームが到来しようとしていた。お祝いムードの陰で隠れていたものの、田中が抱いた危惧は、あまりにも脆い日中関係の実相を理解していたからだろう。田中には、起こり得る将来の不安にどのように対処すべきか、早々に提言したと思われる発言がある。会長・主



【図25】 国交正常化交渉がまとまり、毛沢東（奥）と懇談する大平（右から3人目）ら
 =大平正芳記念財団提供

筆だった1970年1月の社員向け年頭あいさつの一節だ。

中国には、中国の立場があるように、日本にも、日本の立場がある。しかも、現在の日本と中国とは、思想も政治体制も異にしている。日中新関係の樹立は、どうしても、このような両国の国際的立場と政治体制の相違を、相互に認め合ったうえでの「平和共存」の原則に立つ以外にはないのです。³¹⁴

「相違を、相互に認め合う」。これは日中国交正常化のキーワードになった。田中香苗は約2年半後に実現する「日中共同声明」に明文化された精神を予言したことになる。北京到着初日の9月25日、人民大会堂で開催された中国側主催の歓迎晩さん会のスピーチで、中国首相の周恩来、そして田中角栄の日中それぞれから、こんな言葉が飛び出した。

周恩来 わたしは、われわれ双方が努力し、十分に話し合い、小異を残して大同を求めることによって、中日国交正常化は必ず実現できるものと確信しています。中日両国の社会制度は異なっていますが、これをわれわれ両国が平等かつ友好的につきあいていく上での障害にすべきではありません。³¹⁵

田中角榮 もちろん双方にはそれぞれの基本的立場や特異な事情があります。しかしながら、たとえ立場や意見に小異があるとしても、日中双方が大同につき、相互理解と互譲の精神に基づいて意見の相違を克服し、合意に達することは可能であると信じます。³¹⁶

「小異」と「大同」。日中の双方の首脳とも同じフレーズを使った。2人がともに強調したその基本姿勢は、翌日2日目を以降、本格化する国交正常化協議を底流で支えていく。日本の駐中国大使を務めた谷野作太郎の解説によると、「日本人はよく「小異を捨てて、大同に就く」、という言い方をしますが、そのような言い方は、本家の中国にはない。「小異」は残る、残す（「存異」）のである。（略）大切なことは、残った「小異」を用心深く管理しながら「大同」に就くということである」。「小異」を常に頭に置きながら、乗り越え、「大同」、つまり日中の友好と協力を築こうというものだ。『朝日新聞』は日中共同声明調印後の社説で、こう解いてみせた。

去る二十五日の田中首相歓迎夕食会の席で、周首相は「小異を残して大同を求めると言った。田中首相は「小異があるにしても……大同につき」と応じた。「求める」と「につき」の相違は、後者が、すでにそこにあるもの

を対象としているのに反し、前者は探し求めるという語感である。右の言葉は、正常化が発効したこんにちの段階でも、なお生きている。いや、「求める」ことの意義がいつそう重要になってきた。³¹⁸

周恩来はのち、正常化交渉時の日本語通訳、林麗韞にこう教えたとされる。「私たちは『求同存異』を図るにあたって、相手との『異』がどこにあるのかわからずにどうやって『同』を求めるのだ」。³¹⁹

まさに田中香苗の主張どおりになった。大平正芳は1972年11月、「中国問題へのアプローチ」と題した随想を書いている。中国から帰国して、ひと月余りのことだ。張家口での遠い過去の経験、そして直近の難しい交渉を踏まえた内容であり、ある章に書き出しは「日本と中国は、近いようで遠い国である。それは「大晦日」と「元日」の関係にもたとえられるであろうか」と提起した。12月31日と1月1日はたった1日違いだが、それぞれが持つ意味はまったく異なる。日本と中国は距離的には近くても、違うのだ。夫婦の関係にも例えた。

男と女は同じ人間でありながら、物事に対する考え方や処理の仕方が違い、感情の波長や構造も違う。それでいて、夫婦という形で抜き差しならない共同生活をしな

ければならない。だから夫婦生活は、夫婦がそれぞれ、よほどお互いに努力しない限り、うまく運ばないものである。(略)日中兩國の間には共通点よりは相違点が多く、相互の理解は想像以上に難しい。しかし、お互いに隣国として永久につき合わねばならない以上、よほどの努力と忍耐が双方に求められるのは当然である。²³⁰

大平の外交ブレインの一人、新井俊三は「大平さんの基本の思想には中国との交流には冷めた一面が存在したということとです。「冷めた」というのは「つめたい」ということではありません。「冷静な」、「客観的に中国を見る眼」といってよいかもしれません。(略)その後多くの人びとがぬめり込んでいったような中国フィーバーには遂に陥ることがありませんでした」と評価する。

大平正芳が、日中間の問題についてその姿勢を語った言葉がある。北京に旅立つ直前、田中香苗が大平を訪ねた時のことだ。大平はその席で田中に、「法三章」で行く」と言い切った。数日後に始まる国交正常化交渉の原則を示したと言えらるう。

法三章。漢の高祖が秦を滅ぼした後、秦の始皇帝の定めた厳しい法律を廃し、殺人、傷害、窃盗だけを罰すると改めた、わずか3カ条の法律を指す。そこから転じて、法律を簡略でゆるやかなものとし、法治万能主義を排すること

を意味する。大平は「共通点よりは相違点が多く、相互の理解は想像以上に難しい」日中間の懸案を棚上げにしても、正常化を優先させたい決意を示した。社会・政治制度、価値観が異なる日中間において、細かい決めごとを定め、何もかも文言で縛り付ければ、山積する「小異」を前に、交渉はまとまらない。そのことを大平は分かっていた。

中国首脳を相手にする難しい交渉の前に、向き合う姿勢を明かした相手が田中香苗だった。信頼する田中なら、自分の心中を理解してくれるとわかっていたはず。しかも、中国の歴史に由来する言葉を引いたのも、中国を深く知る田中だからこそ、だろう。そして、「日中共同声明」にその精神が見事生かされた。

「日中共同声明」の前文の結びにある「日中兩國間には社会制度の相違があるにもかかわらず、兩國は、平和友好関係を樹立すべきであり、また、樹立することが可能である。」²³¹ことこそ、隣人として付き合う上での「大同小異」の精神と、「法三章」の理念が込められていると言えないだろうか。

国交正常化という一大事業において、大平正芳と田中香苗の間で、どのようなやりとりがなされたか。すでにともに故人となった今、その多くは判明していない。しかし、2人の職業人としての形成過程や思考、背負った背景などをたどれば、共鳴し合っていたことが浮かび上がって来る。

ここまで検証してきたとおり、2人は同郷人というだけでなく、多くの共通項を持つ。1960-70年代のそれぞれの節目における対中国観、対中国姿勢は酷似している。だから、濃厚な付き合いを続け、信頼し合ったのだろう。

大平正芳は熟考型の政治家でもあった。こんなエピソードが残る。日中国交正常化直後のことだ。1972年10月に韓国大統領の朴正熙が予定していた訪日を取り消し、韓国内に非常戒厳令を布告した。軍事クーデターで政権を握った朴を、大平は冷ややかに見つめてきたという。

「大平は、どこの国であつても軍市政権や軍部が嫌いなのですよ。それは張家口での関東軍と接した経験からだと思いますけど、軍人はしょうがないやつだと。だいたい、大平と合わないのは単純明快に割り切る考え方の人で、大平からすれば世の中はそんな単純なものではないと、大平はハードよりソフト重視だけど、軍人はそういう感じではないし、そもそも哲学が違うのですよね」と森田一は述懐する。大平正芳は「単純明快に割り切る考え方」の真逆だった。

義父でもある大平正芳の傍らで、森田一は常に緊張を強いられた。教官から試験を受ける学生のように、大平から森田への問いかけが繰り返された。「君はどう思うか?」。森田が彼なりの答えを返すと、大平は決まって「ああ、そうか」と返事した。

田中香苗は「大平さんは、常に静かで、考え込んで、時

間をかけて判断する。」と大平を評する。「とにかく片言に一言に深い意味をもった言を生み出していく人であった。「あー、うー」は大平さんの専売特許だ。しかし、その間に、考え抜いた言葉を創出する人であり、その場限りの言動をしない人だった。テレビに出て、平然として、討論に負けることのできる人だった。大平さんは、常に静かで、考え込んで、時間をかけて判断する。そこで思い切った実行に踏み出すのである」。

森田一だけではない。大平正芳は周囲の者に、それぞれの問題で、そんな問いかけを繰り返したという。いずれも、高い専門性を有した者たちばかりだ。そして、大平は日中国交正常化を成し遂げた。こと中国問題に関しては、経験においても、知識においても田中香苗をおいてほかにはいない。しかも、視点が極めて似ている。このことは、それぞれの立場において、長期の中国滞在生活を通じて中国社会や中国人を観察してきた青年期の経験、そこから生まれた贖罪意識、さらには日中国交正常化に情熱を傾ける一方で、冷静な視線を忘れることはなかったという2人への言動からわかる。

大平正芳が周囲に繰り返した問いかけは、実は田中香苗の周囲の者も経験していた。田中の孫、平田典史は「『どう思う?』。祖父は若い私にもよく尋ねました。『違う視点』をととても大切にしていた。Aの眼もあれば、Bの眼もある。

自分の意見、他人の意見……。比較できるものがあってこそ、と考える人だった。そして、すべてを聞いたのち、やはり自分の意見が最適と考えれば、決断する。逆に自分の意見に、他人の意見を加味してものごとを進める場合もあった」と証言する。³³³

大平正芳は常に周囲の意見に耳を傾け、熟考した。彼が主導した日中国交正常化も同じスタンスだった。大平が頼った田中の中国問題に関する源泉は、東亜同文書院に発する。田中は、求められるままに意見を述べる場面はあっても、大平の性格や能力をよく知る彼は、自身の考えを押し付けることはなかったはずだ。押し付けずとも、日中国交正常化という到達点を目指す2人に、考えの相違はなかったであろう。

終章 中国を熟知するがゆえに 今日に示すもの

田中香苗ら多くのジャーナリストを輩出した東亜同文書院とはいったい、どのような存在だったのだろうか。中国の学界における同文書院や学生への評価は、概して厳しい。多くに共通しているのは、同文書院や書院生が「特殊な役割」を担っていたとの指摘だ。いくつかの研究論文を挙げてみたい。

黒竜江省にあるハルビン師範大学社会歴史学院の王軍は、東亜同文書院が「中国侵略を目的に『中国通』を養成

した」と定義づけた。³³⁴ 何より運営母体が日本の政界や官界と密接な関係にあり、ほぼ日本人だけを対象にした高等教育機関を、中国国内に設置すること自体、今日ならあり得ないことだ。

卒業を控えた最上級生は毎年夏、グループごとに中国各地、また近隣国へ長期の調査旅行に赴いた。大旅行と呼ばれたこの恒例の遠征は必修科目でもあった。これも同文書院だけが持つ独自性の一つだった。学校の所在した上海だけではない、広い国土を自らの知恵と体力で歩くことで中国を体感。それらは彼らの卒業後にも活きる得がたい経験になっていく。³³⁵

中国側研究者の関心は、その大旅行の調査結果に向く。北京の中国地質大学思想政治教育学院の章磊は「旅行での調査に基づき作成した報告書は、すべて参謀本部、外務省、農商工関連の官庁に提出され、対中政策策定の参考とされた」と論じた。³³⁶

黒竜江省・チチハル市教育教学研究院の王春英も、やはり軍部との関連を強調する。「论近代日本对华文化教育侵略」と題する論文の中で、「日本の政府と軍部は彼らを通じて、中国の多くの政治、産業、ビジネスに関する情報を収集しただけでなく、学生、卒業生の多くが中国や朝鮮へのさまざまな侵略活動に直接関与した」と指摘。「戦時中は日本軍の通訳として活動し、対露戦にあつては軍事探偵

活動に従事した者も多かった。卒業生のうち1487人が中国に残って就職し、それらは工業・商業部門に集中し、日本の経済侵略政策を追い求めた。東亜同文会と東亜同文書院は、中国における日本の文化侵略の先駆者といえる」と断じた。³³⁷

このほかにも、各地方の大学ほか学術機関において、その地方を訪れた大旅行に関する論文があり、多くは日本の対中侵略と関連付けて論じられている。これらは同じく東亜同文書院や学生たちを描きながら、一部にはノスタルジーをも含む日本での書籍、映像とは好対照をなす。

確かに日本が侵出した中国にあった東亜同文書院は、日本の政府、とりわけ軍部との関係を否定できない。日本軍の戦線が拡大し、また戦況が日本の劣勢に傾くにつれ、軍部は中国語の語学力をはじめ書院生が持つ技能を利用するようになった。前述の大旅行には日中戦争以降、軍からの依託調査も加わった。愛知大学名誉教授の大島隆雄は、軍の依託調査を認める一方、「それも基本的には占領地内部に限り、また公然と行われており、(略)広い意味での情報収集活動に属していて、(略)スパイ活動ではなかった。したがって書院が、厳密な意味でのスパイ養成を行ったという形跡はなかったといえる」と中国側研究者の疑念を否定する。³³⁸

歴史が証明してきたように、史実は一つであれ、それを

見る者の立場や背景、さらに観察する角度によって評価は大きく異なる。抗日を建国の旗印の一つにした中華人民共和国にあって、東亜同文書院や書院生に対する今日の学術研究の視点が否定的であっても、やむを得ないことかもしれない。

東亜同文書院は、日本の対中侵略の出先であり、そこで学んだ若者たちは、諜報活動の一端を担ったのか。その評価は国内外の他の研究に委ねる。本稿の目的は、東亜同文書院を出たOBジャーナリストたちが、戦中・戦後を通じて、日本と中国に関係する重要な場面で、どのような役割を果たしたかという点にある。そのことについて、まとめたい。その答えは東亜同文書院、そして学生が「特殊な役割」を担っていたとする前述の中国側の疑念と、実は大きく関連しているように、論者には考察できる。

本稿の対象は、対中国関係における東亜同文書院OBジャーナリストたちの群像である。中国への旺盛な好奇心・探求心を持つ彼らは、その思いを抱いて海を渡り、同文書院へ入った。在学中、その好奇心・探求心は一人ひとりの体内でさらに膨らみ、それらをかえられる職業としてジャーナリズムの道を選んだ。そして、学生時代を過ごした中国の大地に再び飛び出し、職業人としての経験を重ねていった。

中国側研究者の指摘にあるように、彼らが対中侵略の先



飯田 和郎 (いいた・かずお) 氏

1960年生まれ。関西学院大学経済学部卒業後、1983年毎日新聞社入社。佐賀支局、西部本社報道部を経て91年に東京本社外信部。北京特派員、台北支局長、中国総局長(北京)、外信部長など。2013年RKB毎日放送(本社・福岡市)に移り、専務取締役などを務め23年に退職。在職中から西南学院大学院国際文化研究科修士課程に通い、本稿を修士論文として提出(『アジア時報』用に改題)、24年3月修了した。一般社団法人・アジア調査会理事、公立大学法人・福岡女子大学副理事長。

駆者であったかどうかは

別として、中国を熟知する中国通となった彼らゆえに、「日中」に関係するそれぞれの場面において、それぞれがキーマンであったことに変わりはないだろう。だから、中国側は彼らを警戒すべき存在だったと位置付けるようになったのではないか。ある意味で、中国共産党の認識に沿った中国人学者らの疑念は、彼ら同文書院OBジャーナリストの存在の大きさ、役割の大きさを証明しているのではないか。それは戦中・戦後を通じており、同じく戦中・戦後を通じてジャーナリズムという世界に脈打った東亜同文書院卒業生・元在校生の

系譜とも一致している。

第1章で、「竹槍では間に合はぬ」の見出しを掲げた記事(1944年2月23日付『毎日新聞』朝刊1面)の、いわゆる竹槍事件をテーマに、吉岡文六を取り上げた。当時の編集局長、吉岡は、米英を相手にした太平洋戦争であれ、背後には中国という存在、勃興する中国のナショナリズムがあるとわかっていたからこそ、職を辞してまで無謀な戦争継続を批判する記事掲載の決断を下した。第2章に挙げた文化大革命という世界的関心の高い大事件に、東亜同文書院OBを中心とした日本メディアが迫ることができたのも、学生時代に始まる経験が判断の根源だった。さらには北京特派員が国外追放となった際、同じく同文書院同窓である田中香苗の対応は、現職特派員以上に、中国民族の心中を読み切ることができたからであろう。

ジャーナリズムにおける東亜同文書院人脈のクライマックスは、第3章で焦点を当てた日中国交正常化と論者は考える。同じく田中香苗が盟友・大平正芳と歩調を同じくしながら、正常化を後押しした。ただ、そこにはムードに合わせるように日中友好を唱えるのではなく、冷静な視線を持ち合わせていたことは、論じたとおりだ。

一方で、反中国に偏ったわけではない。竹槍事件、文化大革命、日中国交正常化という三つの場面いずれも、東亜同文書院OBのジャーナリストの活動や判断の底流にあっ

たのはやはり中国を、中国人を熟知していた経験だろう。同文書院は、中国大陸をめぐる国際情勢と運命とともにし、そこで学んだ者たちは、その時々々の中国の実相と向き合えたわけだ。

序章で述べたとおり、東亜同文書院OBの存命者はすでにごく少数になった。さらに言うところ、OBらが一線を退いてから、長い時間が経過した。この特異な教育機関の存在すら、一般の日本社会からは忘れ去られつつある。

そして、今日の日中関係の難しさはある意味、彼らが活動した当を上回っていると言えるだろう。中国を知らないままに中国を否定的に評価する風潮が日本を支配する。それはその逆、中国においてもわかりだろう。憂慮すべき事態と言っている。

そのような時流にあるからこそ、彼らが中国とどのようにつき合い、中国をどのように知ろうとしたかを検証することに、意義を見出せる。

もしこの学校がなければ、日中関係は異なる足跡をたどったのではないか。東亜同文書院から、さまざまの空間へと巣立った知中派たちは、日本が中国と向き合う数多く現場で、それぞれが中国を知るがゆえの役割を果たした。その中にはもちろん、メディアに活動の場を求めたジャーナリストの一群も含まれている。

＝ おわり

310 2022年12月10日、東京都港区の森田宅で、論者が森田に行なったインタビューから。

311 浜田健太郎「森田一元運輸相 交渉の目撃者 岳父・大平正芳が予言した日中『茨の道』」(『エコノミスト』、2022年9月13日第4762号) 32頁。

312 前掲、2022年12月10日、論者が森田に行ったインタビューから。

313 田中香苗「『中国と六十年』の出发点」(『動向』、動向社、1973年7月、1326号) 88頁。

314 田中香苗「正しい道標を打立てよう 田中会長「新年のあいさつ」——」(『回顧 田中香苗』) 136頁。

315 (無署名)「在欢迎田中首相宴会上周恩来总理的祝酒词」(『人民日报』1972年9月26日) 3頁。『人民日报』の記事(中国語)は以下のとおり。「我深信、经过我们双方的努力、充分协商、求大同、存小异、中日邦交正常化一定能够实现。中日两国的社会制度不同、但这不应该成为我们两国平等友好相处的障碍」。

316 (無署名)「周、田中両首相のあいさつ全文」(『朝日新聞』1972年9月26日朝刊) 2面。

317 谷野作太郎「日中国交正常化50周年記念コラム 50年前、日中両国の政治の領袖たちは何を語り、何を約束したか」(日中友好協会HP)。谷野は元駐中国特命全權大使(1998-2001年)。https://www.jcfc.or.jp/blog/archives/19562

318 (無署名)「社説 日中関係の新たな出発」(『朝日新聞』1972年9月30日朝刊) 5面。

- 319 本田善彦『日・中・台 視えざる絆・中国首脳通訳のみた外交秘録』（日本経済新聞社、2006年9月）55-56頁。
- 320 大平正芳「中国問題へのアプローチ」（『風塵雜俎』、鹿島出版会、1977年12月）365-366頁。
- 321 新井俊三、森田一『文人宰相 大平正芳』（春秋社、1982年1月）201頁。
- 322 田中香苗「熟慮した言葉」（『大平正芳回想録——追想編』、大平正芳回想録刊行会、1981年6月）331頁。
- 323 劉邦。前漢の初代皇帝。
- 324 紀元前206年。
- 325 紀元前2世紀に在位。韓・趙・魏・楚・燕・齊の6カ国を滅ぼし天下を統合、始皇帝と自称した。中央集権制を敷き、思想統制ほか性急・苛酷な専制政治のため、それらは死後数年で秦が滅びる原因となった。
- 326 日中共同声明の正式名称は「日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明」。中国語では「中华人民共和国政府和日本政府聯合声明」。前文と本文9項目から成る。訪中5日目の1972年9月29日、両国首相の田中角栄と周恩来、両国外相の大平正芳、姬鹏飞の4人が北京で署名した。https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/nc_seimeihimi/191711979年、61年陸軍少将の時、軍事クーデターで国家再建最高会議を組織。63年大統領に当選し4期17年在職。65年日韓基本条約を締結、高度経済成長を実現させた。79年10月、側近に射殺された。
- 328 森田一『心の一燈 回想の大平正芳 その人と外交』（第一法規、2010年3月）121頁。
- 329 前掲、2023年11月10日、論者が森田一に行ったインタビューから。
- 330 前掲、田中香苗「熟慮した言葉」（『大平正芳回想録——追想編』）331頁。
- 331 同前、331頁。
- 332 前掲、2022年12月10日、論者が森田一に行ったインタビューから。
- 333 2022年12月10日、論者が東京・霞が関ビル内の「霞会館」で平田典史に行ったインタビューから。
- 334 王军「近代中日文化交流述論」（『黑龙江教育学院学报』、第28卷第4期、2009年4月）93頁。
- 335 大旅行については、東亜同文書院90周年刊行委員会編『東亜同文書院学生大陸大旅行秘話』（滙友会、1991年10月）、藤田佳久『東亜同文書院中国大旅行の研究』（大明堂、2000年3月）などの出版物がある。
- 336 韦磊「日本现代中国学的兴起与侵华战争」（『南京政治学院学报』、第30卷第3期、2014年3月）112頁。
- 337 王春英「论近代日本对华文化教育侵略」（『齐齐哈尔大学学报 哲学社会科学版』、2006年7月）71頁。
- 338 大島隆雄「アジア・太平洋戦争下における東亜同文書院の変容——いわゆる「詳佃問題」と「止揚の諸契機」に着目して」（『愛知大学史研究』第2号、愛知大学東亜同文書院記念センター、2008年10月）38頁。